

# 時代に見る病気との闘い！

## 伝染病は公衆衛生の母である

日本ではコレラ流行によって衛生観念が一気に高まった。現代の新型コロナウイルスとは病気の特性や医療体制、社会環境は大きく異なるが、当然ながら予防対策には多くの共通点がある。幕末・明治前期の人々は風聞に惑わされながらも、身边を清めて換気をし、外出を控えるなどの努力をして、感染の流行が過ぎ去るまで耐え忍ぶしかなかった。情報や予防グッズがそろそろ現代人に求められるのは、正しく恐れ、正しく対策することだろう。



明治19年の錦絵『虎列刺退治』は、日本国民の恐怖心を表現している。コレラは、虎の頭部に狼の胴体、狸の巨大な睾丸(こうがん)を持つ、奇怪な動物として描かれた。



## 感染症は神や悪鬼の仕業？



### 飛鳥時代

麻疹等の感染症が流行。多くの人々は加持祈祷(かじきとう)に頼ることが多かった。

### 奈良～平安時代

天然痘などの感染症の流行以外に、マラリアなどの病気がすでに知られる。加持祈祷やまじないにすぎることもあったが、国家による医師養成が行われた。

### 鎌倉・室町・安土桃山時代

戦乱による傷の手当を行う外科治療(金創)が発達。外国との交流が進む。

### 江戸時代

天然痘・麻疹、はやり風(インフルエンザ)等の感染症流行。漢方医学や蘭方医学が発達。

### 幕末～明治時代

コレラが伝来して猛威を振るう。明治には、結核(労咳=ろうがい)の感染拡大。新しい薬や治療法が開発。日本の医師は、ドイツやイギリスを通じて西洋医学を吸収。

### 近代から現代へ

20世紀には多くの病原菌が発見。抗生物質、ワクチンが開発。

## 奈良時代に“パンデミック”？

約1300年前の奈良時代にも現代と同じように感染症の大流行が起きていた。政治や民衆が混乱する様子は、奈良時代も今もそう変わってはいない。平城京の遷都後間もない737年(天平9年)に、天然痘とみられる疫病が大流行。当時の日本の総人口の約3割にあたる100万人以上が死亡したと推定される。当時政権を握っていた公家の藤原4兄弟も全員病死し、政治も停止。その当時の対応として、先ず税金を免除した。体の弱い人や病気にかかった人達にお米を支給(賑恤:しんじゅつ)。そして、公的基金の貸し付けを行うといった措置が行われていた。経済政策が重要になるのは、今も昔も同じ...と言える。

引用記事:作家 澤田瞳子